

二〇二五年度

# 日本近世文学会秋季大会

- ・大会プログラム
- ・研究発表要旨
- ・シンポジウム要旨

期日 十月二十五日(土)・二十六日(日)・二十七日(月)

会場 龍谷大学大宮キャンパス  
〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町二二五―一

# 日本近世文学会秋季大会のご案内

会員の皆様にはますますご清栄のことと存じます。  
二〇二五年度秋季大会を開催いたしますので、ご案内申し上げます。  
左記の案内をご確認いただき、お申し込み下さい。

## 記

### ◆参加の手続き

・参加の申し込みと参加費・懇親会費の支払いは、Peatixまたは郵便振替をご利用ください。

[Peatixでの申し込み・支払い]

URLまたはQRコードからアクセスしてください。

URL <https://2025-autumn.peatix.com>

[郵便振替での申し込み・支払い]

郵便局備え付けの振替用紙に金額の内訳を明記してお支払いください。

振替番号・加入者名 ○〇一六〇一―一〇二八二三 日本近世文学会

・申し込みと支払いの締切は十月二日です。Peatixでの申し込みは同日十三時締切です。

・参加費は一〇〇〇円、懇親会費は一般七〇〇円(大学院生・学部生三〇〇〇円)です。

### ◆領収書・出張依頼状

・学会印の入った領収書が必要な方は、学会事務局へご連絡ください。Peatixをご利用の場合、システム上で領収書の発行が可能です。

・出張依頼状が必要な方は、氏名・職名・提出先・出張期間を明記し、学会事務局へご連絡ください。



## ◆大会三日目について

- ・対面形式で開催します。オンライン中継はありません。
- ・会場受付で資料集をお渡しします。不参加の方への資料集の郵送はいたしません。
- ・会場受付で託児料金補助申請書を配付します。必要な方はお受け取りください。
- ・大会二日目の昼食の用意はありません。
- ・大会三日目の文学実地踏査は、会場にて資料を配付しますので、各自・各グループでお回りください。

日本近世文学会秋季大会会場校代表 和田 恭幸（龍谷大学）

メールアドレス ywada5209@let.ryukoku.ac.jp

日本近世文学会秋季大会実行組織 寺田 詩麻（龍谷大学）

岩間 智昭（花園大学・非）

日本近世文学会事務局代表 佐藤 至子

〒113-0033 東京都文京区本郷七-3-1

東京大学文学部国文学研究室内

メールアドレス info@kinseibungakukai.com

大会プログラム

【会場】龍谷大学大宮キャンパス

【行事】

第一日 十月二十五日(土)

委員会(一・一・五〇～一三・一〇)

大会受付(二・二三〇)

開会(一三・三三〇)

委員会会場 東叢三階三〇一教室

研究発表会(一三・四〇～一七・二五)

研究発表会会場 東叢一階一〇一教室

- 1 浅井了意の怪談と軍書『後太平記』—素材摂取の關係性を中心に— 北海道大学(院) 吉藤 岳峰
  - 2 『懷硯』卷四の二「憂目を見る竹の世の中」考—丁蘭説話の利用— 大阪大学 仲 沙織
  - 3 『平安花柳録』の検討—白話による遊女の表現をめぐって— 京都先端科学大学 宮本 陽佳
  - 4 読本『玉搔頭』における長編構成の方法 島根大学 田中 則雄
  - 5 「質屋庫」「塵塚」「屑籠」の真夜中の談話を立ち聞く—西村天囚『屑屋の籠』論— コロンビア大学(院) イ・デン
  - 6 馬場文耕処罰一件資料批判—町奉行所史料を使用して— 岡山大学 山本 秀樹
- 懇親会(一八・〇〇～二〇・〇〇) 懇親会会場 清和館一階食堂

第二日 十月二十六日(日)

大会受付(九・一〇)

研究発表会(九・四〇～一二・四〇)

研究発表会会場 東叢一階一〇一教室

- 7 小原大丈軒の詩観について 九州大学(院) 中山 成一
- 8 林家における蘇軾「聚星堂雪」の受容—林羅山・林鷺峰・林読耕斎を中心に— お茶の水女子大学(院) 鄭 瑞雪

昼休み（一・四〇～二・五〇）

編集委員会会場 東覺二階二〇五教室

研究発表会（二・二五〇～二・四〇〇） 研究発表会会場 東覺一階一〇一教室

10 メトロポリタン美術館所蔵「合作・富士山図」について―妙法院宮真仁法親王文化圏の可視化―

大阪大学名誉教授 飯倉 洋一

11 金沢の前句付

奈良大学名誉教授 永井 一彰

シンポジウム（二・四・二〇～二・六・二〇） シンポジウム会場 東覺一階一〇一教室

「勸化本研究の可能性」

一、本シンポジウムの開催趣旨と勸化本の研究について

司会者 龍谷大学 和田 恭幸

司会者補助 花園大学（非） 岩間 智昭

二、浅井了意の存疑仏書に見る近世前期の仏書出版

大阪大谷大学 木村 迪子

三、誓誓の仏教長編説話

東京成徳大学（非） 山下 琢巳

コメンテーター 鶴見大学 万波 寿子

同朋大学名誉教授 服部 仁

閉会（一六・三〇）

第三日 十月二十七日（月）

文学実地踏査 会場にて資料を配付します。

## 研究発表要旨

### 浅井了意の怪談と軍書『後太平記』

—素材摂取の關係性を中心に—

北海道大学(院) 吉藤 岳峰

浅井了意の怪談『伽婢子』(寛文六年刊)は、『剪灯新話』などの中国小説から構想を得て、『本朝将軍記』などの軍書の歴史著述を基に翻案した仮名草子であり、近世怪談の嚆矢として後代に多大な影響を与えている。一方で続編とされる『狗張子』(元禄五年刊)は、その構想の範圍を『本朝故事因縁集』などの本邦の先行作品にも広げて摂取しており、未だ典拠不明の話も多い。

本発表では、『伽婢子』卷十三の一「天狗塔中に棲」が軍書『後太平記』(延宝五年刊)とその周辺軍書『後太平記評判』『続太平記狸首編』へ摂取されている可能性と、卷三の四「梅花屏風」が中村幸彦氏の先行研究で示された『続太平記狸首編』だけでなく、『後太平記評判』へも摂取されている可能性を示す。また一方で『狗張子』卷三の五「大内義隆の歌」、卷七の一「細工の唐船」、卷七の四「五条の天神」について、新たに『後太平記』が典拠であることを指摘し、浅井了意の怪談と軍書『後太平記』が、互いに素材を摂取し合う關係性であることを明らかにする。

井上泰至『近世刊行軍書論 教訓・娯楽・考証』(笠間書院、二〇一四年)では、「寛文・延宝期刊行の軍書の特徴は、歴史読み物として洗練されてゆく点にあった」とする。本発表では

その考えに基づき、さらに了意における読物化する軍書の位置づけという点を詳細に考究する。

### 『懷硯』卷四の二「憂目を見する竹の世の中」考

—丁蘭説話の利用—

大阪大学 仲 沙織

『懷硯』(貞享四年(一六八七)三月序)卷四の二「憂目を見する竹の世の中」は、左近兵衛の《孝》や母親が《筭》に刺されて死ぬという内容から、先行研究では主に『二十四孝』『孟宗』との関連性が注目されてきた章段である。しかし、卷四の二の展開には《妻との離縁》《母の死》《隣人の殺害》《事件の裁決》など、『二十四孝』『孟宗』には見られない要素が多い。

本発表では、『懷硯』卷四の二の新たな典拠として、丁蘭説話の利用を指摘する。孝子丁蘭を描いた作品としては、亡き母の像を傷つけた妻を謝罪させる『二十四孝』『丁蘭』が現在よく知られている。一方、『二十四孝』とは異なる展開をとる話型も当時広く受容されており、妻を離縁するもの、隣人が母の像を傷つけ、丁蘭が隣人を殺害するものなどが存在する。『懷硯』のもの、妻と隣人の両方が登場するものなどが存在する。『懷硯』卷四の二はこれらの丁蘭説話から要素を取り入れて構成されており、さらに丁蘭や孟宗以外の孝子譚も利用されている。

また、従来左近兵衛の行為は行き過ぎた孝として捉えられてきた。しかし、左近兵衛の行動と当時の孝子像とを比較・検証すると、彼の孝は過剰ではなく、むしろ内実の伴わない空疎な

ものとして描かれていることが判明した。

以上のように、本発表では『懷硯』巻四の二における『二十四孝』に限られない西鶴の幅広い孝子譚利用と、多面的な孝の描写方法について示す。

## 『平安花柳録』の検討

—白話による遊女の表現をめぐって—

京都先端科学大学 宮 本 陽 佳

『平安花柳録』は、京都の遊女たちの姿を白話で描こうとした作品である。傾城・白人・山衆・契短・桑下・比丘尼・釣嬢婦の七つの項目で構成され、宗政五十緒氏により松室松峽の作であることが報告されている。元文年間頃の成立とされ、日本における白話小説的表現の初期の試みとして注目される。文章はやや稚拙ながら、豊富な白話語彙を用いていることが指摘されている。本発表では『平安花柳録』を検討することで、その創作の方法や、日本の人物や風俗を白話で表現しようとする時、どのような変容が生じるのかを考察する。

『平安花柳録』は洒落本に分類されることもあるが、その構成は元禄期の浮世草子が参考にされたことが窺われる。また、吉野太夫や釣り者といった登場人物の描写は特徴的である。『好色一代男』で「情第一深し」と評された吉野太夫は、本作においては「侠」や「義」といった性格が描かれており、市井の釣り者は悪女的な面が強調されている。

これらの人物像は、白話小説『水滸伝』『金瓶梅』や『板橋雜記』

に登場する女性のイメージを踏まえたものと推測され、当時の文人たちが白話小説に見られる女性の類型や評価を積極的に取り入れていたことがうかがえる。また、「侠」の精神を持つ人物像や遊女像は、後の読本や日本の創作白話小説にも見られるため、『平安花柳録』が後続作品に影響を与えた可能性も示唆される。

## 読本『玉搔頭』における長編構成の方法

島根大学 田 中 則 雄

読本『玉搔頭』(司馬芝叟作話、茅停平魚増補、文化九年、大坂刊)に次の話がある。上州の呉服屋十兵衛が、大坂で稼いだ大金を帯して帰郷の途、賊に付け回されて窮迫。宿の遊女御崎が金子を預かり、櫛を合符として渡す。十兵衛は帰宅後、この櫛を盗まれ金子を騙り取られるも、御崎の知略により取り戻す。

この話は津村正恭『譚海』『武州熊谷に農夫あり』の一条を典拠とする(青木繁「信州お六櫛」をめぐって)。但し本作では、この櫛は元来都の玉城家の宝物であったとし、これが同家から盗まれることが発端となつて、雑掌各務阿三郎は苦難に陥り、甲州武田家臣の菱山友次郎は放逐されて町人呉服屋十兵衛となったとする。実は友次郎・阿三郎は兄弟、御崎は元来阿三郎の許婚であった。櫛を主軸に、人物達の(零落と復帰、(離別と邂逅)の筋を緊密に連動させることで長編を構成する。

恰も同じ文化九年、曲亭馬琴が『青砥藤綱摸稜案』後集に『譚

海』同条を用いたことも知られている。但し、櫛の扱いは単発的で、善悪応報、親族間の因果の中で生きる人々の様相を描出することの方に力点を置く。後に『玉搔頭』は『信州お六櫛』に歌舞伎化される（文化一一年、大坂大西芝居。青木前掲論文による）。また馬琴作からは大岡政談の実録「越後伝吉」が成る。これらと対比するとき、『玉搔頭』の方法の特徴が把握できるが、それは、読本の表現様式の根底にあるものは何かという大きな問いを考究するための礎となり得るものと考ええる。

## 「質屋庫」「塵塚」「屑籠」の真夜中の談話を立ち聞か

—西村天囚「屑屋の籠」論—

コロンビア大学（院） イ・デン

西村天囚（時彦<sup>ときひこ</sup>一八六五—一九二四）は現在『朝日新聞』「天声人語」の名付け親、宮内省御用掛、漢籍に通暁する文学博士として知られるが、明治二十（一八八七）年には、帝大を中退した貧乏書生であった。糊口の具として執筆した小説「屑屋の籠」が「小説体に合はぬ」「馬琴の焼直し」にすぎないと謙遜しながら生前三度も重版された。小説の中にみられる公衆道德、知徳教育、出版文化、経済汚職、政治改革、階級意識などの要素を順番に取り上げ、忌憚なく維新以後の「時を慨き、世を罵る」が、その嘲罵の声は屑籠の中から発している点が注目される。一人の屑屋が、長屋の住民に譲ってもらう中古品、破損品が、社会諷刺を展開していることに気づき、「木戸銭なしの寄席」だとして立ち聞きする。擬人化された「屑」らが、夜中に集い

順番に身の上話をする趣向は、曲亭馬琴の考証読本『昔語質屋庫』に倣うと西村は主張するが、一読すればむしろ古典落語や講談、黄表紙や合巻を広く摂取していることが歴然とする。つまり、僅か一、二年前に現れた坪内逍遙の『小説神髓』とは別方向に新「小説」の可能性を求めたといえよう。舌耕藝や戯作に止まらず、堂々たる漢文訓読体（今体文）を基調にし、自作の漢詩文ものもはめ込み、「屑」の旧所有者の身分階層に応じ多様な文体を鏤めている。使い果てたモノ、無視されたモノ、捨てられたモノに話させ、その根源的な「価値」を問い直し、批評の場として創造された作品であろう。

## 馬場文耕処罰一件資料批判

—町奉行所史料を使用して—

岡山大学 山本秀樹

旧幕府引継書の町奉行所史料中に含まれる馬場文耕一件関係者の科書は、南和男氏によりそのごく一部が一般向けに紹介され（『江戸の町奉行』吉川弘文館、平成十七年）、また、それを承けてドイツ法理論研究者による論文で一部が使用されている（山口勉彦「徳川時代の出版規制と文芸—馬場文耕一件を中心に—」『日本大学法科大学院法務研究』六、平成二十二年三月）。しかしながら右に概況を記した通りその使用は極めて部分的なものであり、かつまた、既知の他の資料が持つ記述との比較検討は全く行われていない。つまり、史料間に記述の異同が存在するにもかかわらず、そのことは無視され、その本文批評

の作業は、まったく放置されている。

本発表では、主にこの史資料間の異同を検討して、これまで文耕一件についての主たる資料であった『只誠埃録』中の転写記事のうち、『三曹讞録』からの引用という二名の科書は信頼できるが、引用が省略された事件関係者の氏名については、そのほとんどが、おそらく根拠のない想像によって創り出されたものであり、一方、底本史料の不明により信頼度未知数であり、かつ『野辺夕露』が記述様式から講釈師流の関与を疑っていた『百万塔』十三・十四「幕府時代届申渡抄録」(金港堂、明治二十五年)中の科書には、信頼を置いて良く、事件関係者については町奉行所史料とこちらによるべきことを述べる。

## 小原大丈軒の詩観について

九州大学(院) 中山 成一

小原大丈軒おはらだいじょうけん(二六三七—一七一一)は、備前岡山藩に侍講として招かれ、光政・綱政の二代藩主に仕えた朱子学者である。大丈軒の著作には、『大丈軒集』(写本、二十一冊)をはじめとし、漢詩や儒学に関するものがそれぞれ現存するが、先行研究の蓄積は浅く、大丈軒の事蹟やその思想についてはいまだ十分に明らかにされていない。よって本発表では、大丈軒の基本的な事蹟や関連資料を整理し、その詩観について分析することを目的とする。

大丈軒の詩観は『詩経集注』を中心とした朱子学的文献から語句を引きながら構成されており、北宋の儒学者である邵康

節の影響も受けていると考えられる。また、大丈軒が自身の詩観を確立する契機として、同じく岡山藩に仕えた松井河築まついがき(二六四三—一七二八)との詩文の唱酬があったことを指摘する。両者は朝鮮通信使の筆談唱和の役として牛窓に寓したことをつきかけに、実に多くの詩文を交わしていた。

大丈軒の主眼の一つは、「性情の発」による詩が、その性情の善悪(正邪)にかかわらず「皆実にして偽り無し」と肯定的に捉えられるところにある。この大丈軒の詩観をいかに位置付けるかという問題を、朱熹や同時代の儒学者の詩観と比較検討しながら考察していく。

## 林家における蘇軾「聚星堂雪」の受容

—林羅山・林鷺峰・林読耕齋を中心に—

お茶の水女子大学(院) 鄭 瑞 雪

北宋の詩人蘇軾が、元祐六年に潁州に赴任した際に詠んだ「聚星堂雪」詩の序文には、四十余年前に、師である歐陽修が潁州知事であった際に作った「雪」詩において、雪に関するありふれた語(玉・月・梨・梅など)の使用を禁じたこと(禁体物語きんたいぶつご「禁体物の語を禁ず」)が述べられている。蘇軾の「聚星堂雪」は師の「禁体物語」の技巧を受け継ぎつつ、同時に雪の詩作をめぐる師弟の継承という逸話性をあわせ有している。

「聚星堂雪」は日本にも早くに伝わり、受容の文脈は大きく二つに分けられる。一つは五山禅林における受容で、『皇元風雅集』に見られる「十雪題詠」の第十首「歐陽詩雪」への模擬

である。ここでは歐陽修と蘇軾の逸話が踏まえられつつも、「禁体物語」の規範は意識されていない。他方、近世以降には、「聚星堂雪」に見られるような、技巧性と逸話性を備えた「禁体物語」的な詠雪詩が主流となつてゆく。

近世初頭の漢学者林羅山、その子である林鷺峰および林読耕齋の詩作には、上述の両文脈の受容が併存している。前者は、林読耕齋による「十雪詩」「三十雪詩」などと、それに対する父羅山や兄鷺峰による和作に見られる。後者に該当するのは、鷺峰が寛永十七年に詠じた「季冬詠雪漫賦排律一篇」である。

本発表では、林家の関連作品を取り上げ、逸話性と技巧性の視点から両者を比較検討することで、林家が五山禅林の詩風を近世的詩風へと転換させる一契機を担った可能性を論じる。

## 永田善齋『膾餘雜録』について

—黎明期の漢文随筆—

九州大学 川平敏文

近世初頭の漢文随筆、永田善齋の『膾餘雜録』(以下『雑録』、承応二年刊)を取り上げる。善齋は藤原惺窩門の紀州藩儒。近世の「随筆」とは一般的に、中国宋代の『容齋隨筆』にその典型が見られるような、雑考・雑説的なものであった。『雑録』は、日本におけるそうした「随筆」の黎明期の産物であり、永田善齋という謎多き儒学者の文業を明らかにできる点でも興味深い。本発表では、おもに三つの特徴について私見を述べる。

一つめは、中国明末の書籍の受容。善齋は、李攀龍・王世貞

ら古文辞学派、李卓吾・焦竑ら王学左派周辺、袁中郎・鍾惺ら公安・竟陵派など、明末のさまざまな学派の著述を引用し、賛否両論の所見を述べている。これまで考えられてきた以上に、明末の書籍が主体的に受容されていることが分かる。

二つめは、老荘思想への向き合いかた。老荘を批判するのは儒学者の常であり、善齋にもそれは一とおりに見られるが、その一方で、山林への憧憬、才芸の否定など、老荘的な言説も散見する。同様の老荘受容については、江戸の林家一門のそれが指摘されているが、当時の儒学者の複雑な内面が垣間見られる。

三つめは、日本の歴史・文学への関心。儒学者の関心事として、中国の思想・文学が主体となるのは当然であるが、善齋は、日本の歴史上の人物、物語・謡曲などについてもよく言及している。ここには日本の歴史・文学を儒学的観点から再構築しようとする、林羅山なども共通する志向性が見える。

メトロポリタン美術館所蔵「合作・富士山図」について

—妙法院宮真仁法親王文化圏の可視化—

大阪大学名誉教授 飯倉洋一

妙法院宮真仁法親王が、地下の画家や文人を寵愛・拔擢し、十八世紀後半の京都芸文壇の革新に大きな役割を果たしたことはよく知られている。親王は、詩歌会や席画会を妙法院で催し、文芸サロンの場を形成したが、本発表では、その人的交流の結実のひとつであるメトロポリタン美術館 Cowles Collection

所蔵の一幅「合作・富士山図」について、制作状況、成立過程、着賛者およびその漢詩・和歌などを総合的に検討し、本画賛の文化的意義について考える。

本作は、真仁法親王が描いた富士山に、円山応挙と呉春が麓の木立を添えた絵に、本紙四名（漢詩二・和歌二）、本紙外十一名（漢詩五・和歌六）が着賛した合賛である。着賛順（飯倉推定）に記すと、1 慈周（六如）、2 澄月、3 村瀬栲亭、4 伴蒿蹊、5 皆川淇園、6 慈延、7 清田龍川、8 上田秋成、9 柚木太淳、10 餘弘易、11 加藤千蔭、12 村田春海、13 福井巖助、14 本居宣長、15 小沢蘆庵であり、江戸の歌人をも含めた妙法院宮文化圏のオールスターの観がある。

本作の画は席画であり、着賛は寛政六年から享和元年の間に順次行われ、富士山というより真仁法親王の画を称える賛が少なくないことを指摘する。本作は、あたかも妙法院宮文化圏を誇示する形に仕上げられており、その文化的意義は、真仁法親王の、地下の漢詩人・歌人・画家の俊秀を糾合した文化圏を、合作画賛という形で可視化した点に存すると結論する。

## 金沢の前付

奈良大学名誉教授 永井 一彰

元禄以降、雑俳化に伴い急速に諸国に拡がりを見せた前付は享保末に至って盛行のピークを迎える。この時期に目立つのが地方無名点者による社寺への奉納を謳った興行で、その様子は断片的に残る勝句刷から点者・前付題・勝句数・披露月日・

地域などは大略知ることが出来るのであるが、興行に先立って配布されたはずの引札が該当の勝句刷と共に残ることは殆ど無いため、奉納先・願主・点料・締切月日等々は不明で、興行の全体像が判然としない事例が圧倒的に多い。

このたび取り上げる『金沢会所勝句刷』（仮称）は宮田正信氏旧蔵本（現奈良大学図書館蔵）で、金沢連による享保末から元文・寛保頃の前付勝句刷四十三点を収録。珍とすべきはその殆どが引札を勝句刷の冒頭部に転用していることである。つまり引札と勝句刷がセットで残っているわけで、照合することにより興行の様子がかなり具体的に分かってくる。

また、金沢の連中は地元でかような前付興行を日常的に催すのと併行して、京都点者による不定期の規模の大きな万句興行にも大量の句を寄せていたことも現存会所本から確認することが出来る。

今回の発表では『金沢会所勝句刷』から知られる当地の前付興行の実態について報告し、その濫觴について触れると共に、夥しい付句を生産していた金沢の作者がどういう階層の人たちであったのかにも及んでみたい。

## シンポジウム要旨

### 勸化本研究の可能性

従来、勸化本は、近世小説の典拠、あるいは周辺資料として、諸先学の論考、あるいは各種の校訂本の頭注や解説に登場してきた。もちろん、堤邦彦氏の『江戸の怪異譚―地下水脈の系譜』(二〇〇四年・ぺりかん社)を始めとする諸研究、あるいは後小路薫氏の『勸化本の研究』(二〇一〇年・和泉書院)のように、近世期の唱導資料を積極的に研究対象とするものもあつたが、研究人口が飛躍的に増加するようにはならなかつた。

しかし、近年においては、木村迪子氏、万波寿子氏らの研究活動のように、それ自体を研究対象とする方向へと移り変わっている。そのような研究動向を受け、本シンポジウムでは今一度、素朴ながらも、勸化本を以下の二つの観点から考察し、意見交換を交えつつ、研究者相互の共通理解を深めたい。二つの観点とは、一つには「出版」(有名な作者とその偽書をめぐる諸問題)、二つには「内容」(仏教長編説話の創作方法と特徴)である。

なお、本シンポジウムの進行は、①司会者と司会者補助(和田恭幸氏・岩間智昭氏)によるシンポジウムの開催趣旨と勸化本研究に関する概説、②木村迪子氏の研究発表、③山下琢巳氏の研究発表、④コメンテーター(万波寿子氏・服部仁氏)による質問や提言等、⑤質疑応答の順を予定する。パネリストの人数を少なくしたのは、忌憚なき質疑・応答、活発なる意見交換

を期待してのことである。

#### 一、本シンポジウムの開催趣旨と勸化本の研究について

司会者 龍谷大学 和田 恭幸

司会者補助 花園大学(非) 岩間 智昭

#### 二、浅井了意の存疑仏書に見る近世前期の仏書出版

大阪大谷大学 木村 迪子

近世前期最大の仮名草子作家・浅井了意は鼓吹物の第一人者でもあるが、その著作には偽書が多く、真贋判定は了意研究の根幹をなす。本発表は、先行研究を更新する視座から、了意の存疑仏書をめぐる書誌的問題を取り上げる。

具体的には、『父母恩重経話談抄』(元禄二年(一六八九)刊)の板元問題や、『法語鼓吹』(元禄六年(一六九三)刊)が玄貞による偽書である蓋然性、更にこれらの証左として用いられてきた元禄九年(一六九六)刊『増益書籍目録』の信憑性を論証する。

これらの分析は、作家没後にその權威を利用した商業出版が活発化する実態を浮き彫りにする。こうした仏書の偽書の検討を通じて、近世出版文化の一面を明らかにしたい。

#### 三、誓誓の仏教長編説話

東京成徳大学(非) 山下 琢巳

宝暦から天明期の江戸では、草双紙や狂歌等が主流を占め、

やがて、寛政の改革をへて、後期読本時代へと移行する。この時期の長編読み物としての欠落を補ったのが、実録本と仏教長編説話である。このうち仏教長編説話は、浄土宗などの説教僧が、説経・古浄瑠璃などで扱った宗教的な説話をもとに、そこに潤色を加えて長編物語としたもので、書肆より刊行された。これらの書が、中国白話小説とならんで、文化年間、馬琴、京伝らの後期読本発生に大きな影響を及ぼしたことは、諸氏により指摘されている。

武州川崎在住の唱導僧誓誓は、この仏教長編説話の作者のひとりで、その著『安倍仲磨入唐記』四卷四冊(宝暦十年(一七六〇)序)、『泉州信田白狐伝』五卷五冊(宝暦七年(一七五七)刊)は、浅井了意作とされる『安倍晴明物語』を主な典拠とする。二書ともに寛政年間に再版されて、文政二(一八一九)年には、畠山保躬による挿絵が施されて読本『絵本輪廻物語』五卷五冊として上方で再生される。この誓誓には、やはり宝暦七年(一七五七)刊の『勸化五衰殿』五卷五冊、『勸化五衰殿附録』二卷二冊がある。本発表では、この二書を取り上げ、その創作法から仏教長編説話の特徴を探る。

## 会場へのアクセス



- ・JR 東海道本線・近鉄京都線・京都市営地下鉄烏丸線「京都」駅下車、北西へ徒歩約 15 分（市バス約 10 分）  
最寄りのバス停：市バス「七条堀川」または「七条大宮・京都水族館」
- ・JR 山陰本線（嵯峨野線）「梅小路京都西」駅下車、北東へ徒歩約 10 分
- ・阪急京都本線「大宮」駅下車、南へ徒歩約 20 分（市バス約 10 分）

会場案内図



